

「シッディ・クール」と「屍語故事」(上)

烏力吉巴雅爾 著
西脇隆夫 訳

チベット族とモンゴル族の民間に、チベット語で「屍語故事」(ro sgrung), モンゴル語で「喜地呼爾」(shiditu hegurun uliger) という不思議な説話集が広く伝わっている。それはインドに由来し、「僵屍鬼故事」とも言う¹⁾。その流布の方向はインドからチベット地域、チベット地域からモンゴルに至り、それぞれの話は口頭で伝えられた以外に、大部分の話は文人の翻訳を経て文献記録の形式で次から次へと広がってきた。

金克木先生は次のように述べている。

健日王を中心人物とする説話集には二部ある。一部は『僵屍鬼故事』25篇であり、もう一部は『宝座故事』32篇である。この二部の説話には現在それぞれ数種の異なる校訂本がある。この二部は健日王を称え、その名が異なるテキストの中で分かれているにすぎない。『僵屍鬼故事』はその知恵と勇気を誇り、「宝座故事」はその自己犠牲と慈善事業を引き立てている。現存のテキストから見ると、両書はいずれも封建社会の産物であり、これらのテキストの発生年代はそれほど早くない²⁾。

佟錦華先生はこう述べている。

チベット族の歴史書、たとえば『柱下遺教』、『西藏王統記』、『賢者喜宴』、『青史』などの記載によれば、チベットの山

南地域のジャロン部落における第8代ザンボ時期に「屍語故事」が流行していたとのことである。数えれば、2世紀前後となる³⁾。

「シッディ・クール」のモンゴル語版テキストとその内容については、モンゴルの学者ツェ・ダムディンスルン(策・達木丁蘇栄)氏が詳細な研究をしている。その統計によれば、モンゴル国のモンゴル語写本は5種類あり、13章本(8種の異文)、22章本、26章本、30章本と35章本などがある。この他に、モンゴル国にはチベット語写本が10種あり、それらの大部分は13章と21章の2種である。

ダムディンスルン氏はモンゴル語13章本の異文に対して比較を行った後に、つぎのような結論を下している。

1. 前半13篇の話はチベット語13章本から翻訳したもの。
2. すでに見つけた13篇の話の中で完全な5篇と不完全な2篇あわせて7篇のモンゴル語訳文から見ると、モンゴル語本はモンゴルで広く伝わり、何度も翻訳されている。
3. その中の1篇はおそらく16世紀後半に翻訳され、その第2の異文、あるいは第7の異文はその時期かあるいはもっと早くに翻訳され、その他はすべて後期の訳文である⁴⁾。

かれはチベット語の「屍語故事」に対しても次のように結論を下している。

チベット語には21章と13章など2種類

の異なるテキストがあり、その中で6章の内容は互いに似ていて、その他は完全に異なる話である。13章本「屍語故事」の写本の末尾には嘉日保（あるいは照日保）パンディタ著などの文字があるけれども、その作者がいつの人で、どのような人かははっきりしていない⁵⁾。

アジア諸国に伝わっているインドのこの民話集がしだいにヨーロッパ人に知られる過程で、モンゴル語写本は疑いもなく掛け橋の役割を果たした。よく見かけるモンゴル語本「シッディ・クール（喜地呼爾）」は25章であるが、実際に細かく分けると26章になる。というのは、それは最後の章はその前の章と一つにまとめられているからである。つまり、第25章の後の部分には各章に必ず付けられている短い概括の言葉を欠くため、1章の結末を欠くことになるからである。本文の依拠するのはこのようなテキストである。

構造から見ると、「シッディ・クール」で始めから終わりまで語られているのはサイン・アムグラントゥ汗であり、ナカザナ・フトゥクトゥ法師の意図どおりに、死体の森の中に行って、魔法をそなえたふしぎな死体を探し、それを背負ってもどってくる話なのである。これが全体の枠組みであり、実際はそれら互いに独立した話は、すべてこの枠組みの中で「シッディ・クール」すなわち魔法をそなえた死体によって語られている。

物語は、可汗に捕らえられた死体が逃れるために、可汗に話をさせ、そうすれば、墓地に逃げられるように作られている。すべての話は死体そのものと関係なく、死体が語るにすぎない。話が最も精彩のあるところまで語られるたびに、可汗は思わず口を出し、そこで死体はもとの場所にもどってしまう。可汗はしかたな

く、再びもどって死体を探し、このように26回くり返し、26篇の話を聞いて、しまいには死体を法師のもとまで背負って行く。「後の人類の寿命が延び、諸方の事業は栄え、政治と宗教が隆盛となったのは、これにもとづいている。願わくば富貴が続き、いつまでもめでたからんことを！」すべての物語はここで終わる。

「シッディ・クール」がふれる内容はかなり広く、世の中の喜びや悲しみ、自然界の弱肉強食、人と人、人と自然、自然と自然界の神霊の間に発生する複雑な関係すべてに及んでいる。多くの話は知恵を賛美し、弱者に同情し、友情を強調し、虚偽をあばき、貪欲をむち打ち、愚昧さを風刺するなど鮮明な思想傾向で読者を魅了した。物語の結末では、しばしば弱者が強者に勝ち、地位の低い者が家柄の良い者を負かし、正義が邪をおさえる。物語は善には善の報いがあり、悪には悪の報いがあるという道理をくりかえし強調している。国境を越え、民族を越え、次つぎと伝わって長らく衰えない生命力も、これらの鮮明な思想傾向に基づいている。

死体が語る話は、各章が相対的に独立しているだけでなく、相対的に独立した話はしばしばいくつかの短い話を合わせている。これもこの説話集の特色である。それらの短い話は民間伝説に由来し、文献記載にも由来している。もしもこのように煩雑な話とモチーフに対し根源を求めるなら、この説話集はおそらくインドに源流があるとひと言で言うことはできないだろう。

比較に都合がよいように、モンゴル語本各章の内容のあらすじを示そう。

第1章 インドの中部に7人の魔術師の兄弟がいた。かれらに魔術を習いに来たのはある家の長男だったが、長らく入門できなかった。弟はいつも兄に食事をとどけていると、いつのま

に魔術を身につけてしまった。

ある日、弟は馬に変わり、兄を乗せて商いに
出かけた。兄は馬を7人の魔術師たちに売って
しまう。かれらはこの馬を殺してその血を飲
むため、草を食べさせず水だけをやった。あ
る日、かれらは馬を川辺まで連れて行くと、馬
はすきを見つけて魚に変わって逃げ、魔術師た
ちは鳥になって追いかけた。魚はまたハトに
変わって逃げ、魔術師たちはタカに変わって追
いかけた。ハトは必死になって洞窟で修行して
いる法師ナカザナのもとまで飛んで行って救
われ、もとの姿にもどると、じつはサイン・ア
ムグラントゥ汗であった。

自分を救ってくれた法師に対する恩に報いる
ために、汗は死者の魂の集まる森に行き、上半
身が銀で下半身が金、頭がサザエでできた死
体を探しに行くことを承知した。かれは困難な道
のりを経て、森に着くと、死体を見つけて背
負ってもどった。可汗は道を行く寂しさをま
ぎらすため、死体が物語を話すのを認めた。

死体は次のような話を語る。

むかし、6人の子がそれぞれ技術を学びに
出かけることを相談し、分かれる前に命の木
を6本植えて、将来ここに集まることを約束す
る。6年後に、みんなは次つぎと命の木のそば
にやって来たが、金持ちの息子一人は音沙汰
がなかった。そこで、それぞれ修行につとめ
た5人の中で、占いを学んだ者が金持ちの息子
がいる位置を当て、石工はかれを石の下から救
い出し、医者が薬を配合してその健康を回復し
てやった。じつは、かれがなかまたちと分かれ
た後に、美しい妻を娶って、幸せな生活を送
っていた。けれども、幸せは長く続かず、妻は可
汗に奪われ、自分も死地に置かれていた。かれ
は助けられたが、妻はまだ他人の手にあった。
怒りが収まらない友人たちは絶妙な手を考え

し、大きくて空を飛べる木の鳥を作り、金持ち
の息子をその腹の中に入れて、可汗の屋敷まで
飛ばせ、さらわれた妻を救い出した。ことがう
まくいき、みんなが集まったときに、金持ちの
息子の妻がたいそう美しいのを見て、自分のも
のにしたいと思って、新しく争いはじめた。こ
のとき、話を聞いていたサイン・アムグラ
ントゥ汗は残念そうな言葉を発して、死体は逃
れてしまう。

第2章 死体は語る。むかし、ある農業国は
一すじの河を灌漑していた。しかし、河の源に
2匹のカエルが守っていたが、かれらは毎年そ
の国がささげる人を受けとらないと河の水を流
さなかった。ある年、ささげる対象が国王の番
になり、そこで国王の子が自分から父の代わり
に行くことを申し出る。幼いころから王子と仲
のよかった子が友の代わりにいけにえになろう
とした。王子は承知せず最後にかれらは二人で
行くことにする。出かける前に用意していた二
人はたまたま2匹のカエルの会話を耳にして、
かれらの言うとおりにカエルを殺してその脳を
食べると、その結果、王子は金を吐き、その友
だちは銀を吐くようになる。

かれらは遠く異郷に出かけ、不幸にも途中で
酒売りの女に酔わされ、たくさんの金銀を吐き
出し、その家から追い出されてしまう。かれ
らは歩きつづけ、途中運よく身を隠せる帽子
と空飛ぶ靴を手に入れた。かれらはこれらのふ
しぎな物によってある国の国王と家臣の身分を
得る。ある日、王子の友だちが身を隠せる帽子
をかぶって都を巡視している時に、王妃が雲か
ら降りてきた天の子と密会しているのを見つ
ける。天の子が再び鳥に変わって王妃と密会した
時に、火でそれを焼いて追い払ってしまう。

第3章 ヤルパは体が人間、頭は牛で尾の長
い怪人だった。父親に殺されないために、家か

ら出て行くと、三人の友だちを作り、いっしょに狩りをして暮らす。かれらは毎日一人が留守番に残って食事を作り、他の者は狩りに出かけた。代わる代わる家で食事を作った者は、続けて三日も小さな乞食の老婆に食事をすっかり食べられてしまったが、ほんとうのことが言えず、馬飼いや牛飼いやロバ飼いの人に食事をうばれたとうそをついた。ヤルパが食事を作ることになると、老婆がまた物乞いに来た。ヤルパは彼女の企みや、妖婆なのを見破り、そこで友だちのうそも暴かれてしまった。

真相が明らかになると、みんなで話し合い、いったい老婆の住みかになにかがあるか見に行くことにした。ところが、老婆の住みかは井戸のように深い洞穴で、中にはたくさん金銀の類の貴重なものがあつた。三人の友だちはだれも降りようとしないので、相談して、まずヤルパを縄で結わえて下へ降ろし、縄で下の貴重な物を引っ張りあげてから、最後にヤルパを引き上げることにした。けれども、金銀を手に入れた三人はよからぬ気持を起こして、ヤルパを洞穴の中に落としてそのままにした。

ヤルパは洞穴から杏の実を三粒見つけ、それを土の中に埋めて祈ると、天まで届くような大木が生え、かれはそれをよじ登って洞穴をぬけ出る。ヤルパは恨まずに、ずっと善行をほどこした結果、天に昇って天神（白い雄牛）を助けて悪魔（黒い雄の牛）を負かしたため、最後に北斗七星に変わる。

第4章 ある怠け者が狩りに出かけ、うっかり衣服や帽子、馬と犬をなくしてしまう。夕方、ある家の中庭に隠れて、夜を過ごそうとした。そこへ一人の夫人がかれのそばで用をたして、指輪を落としてしまう。彼女が立ち去ると、牛がその指輪の上に小便をかける。かれはこれらすべてを眼にする。

あくる日、その夫人はだいじな指輪をなくしたので慌て、家中のものに探させると、庭の中で寝ている怠け者を見つける。かれは古い師だと自称し、着物や食べ物をもらってから、占なうふりをして、あの指輪のありかを示し、尊敬されて、手厚いほうびをもらう。

このブタの頭をつけた杖を持つ古い師は、病魔に取り付かれ今にも死にそうな国王に出会う。かれは二匹の妖怪がヤクになって国王に術をかけたことを見破り、知らずに耳にした呪文で、妖怪の姿を現してかれらを焼き殺し、国王を救う。かれはまたもやみんなに尊敬され、手厚いほうびをもらって、その名声が広まった。

第5章 ある汗と皇后は一子をもうけ、ナレンゲルトと名づけ、虎年生まれだった。まもなく、皇后は死に、汗はまた妃をめとり、一子をもうけ、サレンゲルトと名づけた。継母は、わが子が即位するのを妨げるのは前の妃の生んだ兄だと思った。彼女はこの悩みを除くことをあれこれ考え、自分は重病にかかったので、二人の子の心臓を食べないと助からないと汗に告げた。サレンはこの言葉を耳にすると、兄に告げ、二人はいっしょに逃げる。

かれらがある洞穴に来ると、仙人に出会い、父子の契りを結び、かれとともに暮らす。仙人のいる国の慣わしでは、毎年虎年の者を竜王にささげることになっていた。ある年、ナレンゲルトがささげられる番になった。祭りの儀式で、国王の娘はかれの顔立ちが並々でないことをひと目見て気に入る、かれを残さなければ、自分もいっしょにささげられたいと言った。娘は誰が止めても聞かなかつた。国王はしかたなく、二人をいっしょに竜王にささげるしかなく、竜王はかれらが心から愛し合っているのを見て、死を免じて、水辺に出してやった。国王は娘がもどって来たのを見て、事情が明らか

かになるとたいそう感動した。大難にも死ななかつた恋人たちのため、国王は自ら婚礼を挙げてやり、使いを出してナレンゲルトの身内の者一仙人、弟およびその父母を招いて婚礼に参加させた。あの腹黒い継母は、新郎新婦と自分の息子を見ると、怒りの炎が胸にこみあげ、急に血を吐いて死んでしまった。

第6章 むかし、傲慢な者がいたが、国王は目障りなので、かれを他国に追い出してしまった。ある日、傲慢な者が大木の前まで来ると、一頭の馬が死んでいた。かれは空腹を満たすため、馬の頭を切り取って腰に付け、それから木によじ登って食べようとした。突然、四方八方から樹皮の服をまとい樹皮の馬に乗った妖怪と紙の服を着て紙の馬に乗った妖魔たちがたくさん現われ、木の下に集まり、夕飯のしたくを始めた。木の上の男は慌てふためいて腰に付けていた馬の頭を落としてしまい、びっくりした妖怪たちは四方に逃げてしまった。

あくる日、傲慢な人は木の上から降りると、何でも手に入る金の碗を見つける。かれは金の碗で、三人の旅人から物を奪う魔法の杖、城を建てる魔法の斧と自然を操れる魔法の皮袋を取り替える。傲慢な者の腕前はますますかなわなくなり、そこでかれは国王に報復し、その国土と財産を手に入れる。

第7章 ある家に三人の娘がいて、姉妹は代わる代わる牛を放牧に出かけていた。ある日、長女は放牧している時に居眠りをして、眼がさめると牛がいなくなる。長女は牛を探している途中で山の洞穴に赤い門を見つけ、開けて中に入ると、中には金の門があり、また開けると中には高い台があり、台の上にはふしぎな雄鶏が坐っている。彼女は近づいて雄鶏に牛を見なかったかと尋ねると、雄鶏は、自分の妻になるなら教えてあげると答える。彼女は承知しな

かつた。あくる日、次女が牛を探しに出かけ、また雄鶏のすみかまで行って、前日とおなじ問答したが、彼女も承知しなかつた。三日目に、末の妹が牛を探しに行き、雄鶏に出会い、彼女は妻になることを承知する。

まもなく、ある寺の集まりがあって、美男美女のコンテストが催され、妹は続けて十二日間も選ばれた。男は、とび色の馬に乗った若者が続けて選ばれた。末の妹は、じぶんの夫があのような若者ならとてもよいのにと考えた。ちょうどその時、ある老婆が彼女に、あの若者はじつはおまえの夫だから、もどってその鳥の皮を焼いたら、もう雄鶏にならなくなると教えてくれる。妹が家にもどって鳥の皮を焼くと、それから夫は家にもどれなくなり、阿修羅の奴隷になってしまう。しばらくして、彼女は夫に出会い、その言うとおりに、雄鶏の模型を作り、かれの魂をその上に付すと、再びいっしょになることができた。

第8章 老国王の死後、その子が即位する。新国王はその臣下に才能のある者が二人いて、かつて父王の腹心であり、一人は大工で、もう一人は塗装工だったが、かれらは仲がよくなかつた。ある日、塗装工は手に偽書を持って来て、国王の面前で、お父上が天上で転生し、寺院を建てるために大工を必要としているというお手紙を寄越されましたと言った。国王が手紙を見ると、「余は天国でなにかもうまくいっているが、近く寺院を建てるつもりなので、天上に大工を遣わしてほしい。天へ登る方法は塗装工に細かく聞け」と書かれていた。国王は大工を呼び寄せ、父王の意向を話し、塗装工の意見どおり、1週間後に火災でかれを天上に送ることにした。大工は自分の家の菜園から天へ昇ることを承知した。7日目に、人びとが菜園に集まると、大工を油がいっぱい注がれたたきぎ

の山に置いた。鼓がいっせいにならされた時に塗装工が点火すると、火が激しく燃え、濃い煙が立ちこめ、人びとは塗装工が「大工はもう煙とともに天へ昇った」と言うのを耳にした。ところが、大工は事前にたきぎの山の下に地下道を掘っておき、地下道に沿って家にもどり鋭氣を養っていた。数ヵ月後、かれは手紙を持って国王に面会した。手紙には、「寺院はすでに建てられたので、今は塗装工に飾れる必要があり、すみやかに前のやり方で塗装工を天上に遣わすように」と書かれていた。塗装工は大工を見て、わけがわからなかったが、かれのようすと身なりを見て、承知するしかなかった。7日後、人びとは同じように火災でかれを送ったが、かれは激しい火に焼かれてしまった。

第9章 むかし、若い国王が、母や妻とともに国を治めていた。かれはたまたま田舎の娘と知り合いひそかに付き合っていたが、まもなく病気になり死んでしまった。ある夜、娘は国王が自分に会いに来たが、体に服を付けていないことに気がつく。国王は娘を宮殿のそばまで連れてくると、読経の声を耳にして、「私はもう死んでしまったが、おまえはまもなく私たちの子を生むだろうから、おまえと母で育ててくれ。家にはトルコ石があるから、妻にやり、実家にもどせ。わしらは毎月15日に会おう」。そう言って、見えなくなった。娘はすべて国王の言いつけどおりにしたが、一月に一度しか会うのはあまりにも少ないと思い、永遠にいっしょにいられることを望んだ。国王は娘の考えを知ると、「おまえに度胸があるなら永らえられるだろう」と言い、娘は死んでもやってみると言った。果たして、娘は自ら冥土へ行き、鬼たちの審査と尋問を受け、順調に死者の心臓が置いてあるところまで行き、国王の心臓を手に入れ、追跡者を逃れて、無事にもどり、国王を復

活させ、それから二人はいつまでもいっしょになることができた。

第10章 二人の兄弟がいっしょに暮らしていたが、兄が結婚すると、兄嫁は弟を馬鹿にするため、弟は一人で暮らすようになった。あるとき、兄嫁は家で宴会を催すことになり、弟を招いた。一日目と二日目の宴会に弟は行かず、三日目の晩かれはこっそり広間に隠れていた。酒席が終わって、みんながいなくなったら、金目の物を持って行こうと思ったからだ。深夜静になり、兄が眠ると、兄嫁は食べ物を用意して急いで家を出て行った。弟がこっそりその後をつけると、兄嫁は墓地に行き、死んだばかりの男の死体を見つけ、愛情をこめて食べ物をじぶんの舌にのせて男に食べさせた。その死体はふいに彼女の鼻と舌に噛みついた。彼女は急いで家にもどって夫のふところにもぐりこんで、夫に口づけせながら、大声で「どうして私をこんなふうに噛んだの」と叫んで、夫に言い訳させなかった。あくる日、役所に訴えたため、役人は夫を旗ざおにつるしてさらし者にした。弟はほかの人から兄のようすを聞いて、急いで役所まで行きじぶんが見たことを裁判官に告げた。裁判官があつた男の死体を調べさせると、はたして女の舌先が男の口の中に残っていた。そこで裁判官は兄の無罪を宣告して釈放し、兄嫁は誣告罪で吊るされてしまった。

第11章 年寄りの夫婦と娘があるぼろ寺の前に住み、かれらはいつも寺の観音さまにお参りしていた。ある晩、夫婦は娘が将来独身がよいか嫁に行ったらよいか話し合ったが、考えが決まらず、観音菩薩に訊ねることにした。この時、ある貧しい若者が寺の門を通り過ぎ、二人の話を耳にして、あくる日早くに観音の後ろに隠れていた。年寄り夫婦が菩薩に娘はどうすればよいかと訊ねた時に、若者は仏さまのよう

な声で、明日の朝早くに叩頭している男にやればよいと答えた。夫婦は仏さまの声を耳にすると、たいそう喜んだ。つぎの日若者は娘を連れて出かけた。野原に来ると、持っていた木箱に娘を隠し、家にもどって娘をどうするか家族の者と相談した。

ある国王が狩りをしているうちに木箱の中の美しい娘を見つけ、たいそう喜んで彼女を娶ろうとした。その娘はもしも箱の中に動物を代わりに入れてくれるならば承知すると言った。国王は娘を宮殿に連れて行き幸せに暮らした。若者は娘を殺して、トルコ石を売り、その金で商売をしようと考えた。そう考えを決め、かれは箱を家に持って帰り、夜になって開けると、中にいた虎にかみ殺されてしまった。

第12章 ある国王は人びとが国内にたいそう賢い青年がいると聞いて、妬ましく思い、自ら試したくなり、かれを呼び寄せた。国王は、「わしには命の宝石があり、もしもお前が手に入れたらやるが、できなかつたら罰するぞ」と言った。青年はそうしたくないと答えたが、もう決められてしまって、変えられなかった。ある真っ暗な夜に、かの青年は国王の中庭の内外や宮殿の前後にいる見張りや護衛をさまざまな方法でやつけてから、国王の命の宝石をこっそり持ち去った。しばらくして、青年は国王に宝石を返したが、怒った国王は青年が遊びの決まりを破ったと言って、かれを処刑にしようとした。青年は怒って国王の宝石を叩きつぶすと、国王は全身から血を流して、たちまちあの世へ行ってしまった。

第13章 ある商売人が荷物をいっぱい積んだ小さなロバを引きながら道を行くと、途中で子どもたちが子ネズミ、小猿や小熊を苛めているところに出くわした。かれはひどくかわいそうに思っ、商売用の品物と動物たちと取り替

えたが、自分は元手をなくしてしまった。どうしようもなく、かれは国王の倉庫に入って物を盗もうと考えた。運悪くかれは盗めないで捕まり、木箱に入れられて河に流されてしまった。かれが今にも死にそうになっていると、かれに救われた子ネズミ、小猿と小熊が助け合っ、てかれを救い、そのうえかれはなんでも思うようになる宝物を手に入れて、しだいに有名な大商人になった。

物語がここまで語られると、作者について説明する、つぎのような文章が挿入されている。

Hoyadugar ilagugsan nakancun – a yin genel eyer humun – u erhetu sayin amugulangtu hotala – yi bayashaju setegel – un undusun shin – e checheg – ud – i bolbasurgulun johiyahsan yosun – i dagaju yirtinchu – yin ene uges – un hauli – yi merged ba. Arad bugudeger sonosun hereglehu – yin tula duran buliyahu johistu edger sayihan uges – i shasdir – un totor – a eche huriyagsan uges – un badag – un tedui uber – un oyun eyer tug tumen ayalgu lug – a tegusugsen edeger uges – i humun – u erhetu teguldur buyantu hemehu durduhsan eyer urun – e eteged tehi ahui delger sum – e dur tabun uhagan – u oron dur mergen bologsan warbuu bandida hemehu johiyabai. Ene shasdir – i hamig – a anu ugulehu bugesu tere yeru – yin shidi boloyu hemen nakancun – a – yin ugulegsen metu turbel ugei bututugui.

第二位の殊勝者ナカザナの光輝によって、地上の施主サイン・アムグラントゥは衆生をあまねく喜ばせ、育てし心がのびのびとして愉快になる道理とともに、

世間のこれら言語の意味を、知者と平民に聞取らせる方便のために、テゲルドゥル・バヤントゥの提案にもとづき、五明学に通じた西方のアフィ・デルゲル寺のワルブウ・バンディダによって、その智慧でこれら人をうっとりさせる多くの美しき言葉を、もろもろの典籍より集めてこれを編纂した。願わくばナカザナの述べるように、この書を閲読して、たちどころに神玄円満を得られんことを⁷⁾。

その他の章はこのまわりくどい言葉のあとにあり、以下で続けて紹介することにしてしよう。

第14章 財産を作った弟は自分の兄が貧しいのを嫌って、かれを家から追い出した。貧しい兄は一群れの人びとがふしぎなところから斧を取り出して袋を叩いて、たくさんのお金を得るのに気がつく。じつはそれは「如意袋」で、食べ物や着る物がなんでも手に入る。兄は人びとがいなくなるのを待ってから、斧と袋を手に入れてこっそりと逃げ、同じようにやると、たちまち豊かになった。

弟は兄が一夜で豊かになったわけを訊ね、それを知ってから急いであの宝物を探しに行き、宝物を奪われて怒った人びとに捕まってしまう。宝物を取りもどせなかった人びとは怒りのあまり魔法を使って、弟の鼻に九つのこぶを生やしてしまう。このこぶは斧で呪文を唱えながら取らないと取るすべがなかった。かれは兄に、取ってくれば、財産を半分わけてやるからと頼む。兄が八つのこぶを取ったとき、弟は悔やみはじめた。兄がそれに気がついて最後のこぶを取るかどうかためらっていると、呪文を知らない弟の嫁が斧を奪い、あわてて夫の鼻の最後のこぶを切ると、こぶは取れずに、夫を斬り殺してしまった。

第15章 国王と大臣の子が連れ立ってインドに学びに出かけ、10年後にいっしょに帰郷する。途中でひどく暑くて我慢できないほどのどが渇く。ふいにカラスが頭の上を飛んで、ア克蘭と鳴いた。国王の子は、南の方に行けば近くに湖があるとカラスが言ったと話した。ふたりが行ってみると、果たしてそのとおりだった。大臣の子は、自分の学問が国王の子に劣っていると感じて、妬ましく思いはじめ、あるところかかれを殺して、ひとりでもどった。国王は悲しみのあまり大臣の子に、王子は臨終の時になにか遺言はなかったか訊ねた。かれはアブリシゲという言葉しか残さなかったと答えた。国王は千名の文官に、7日以内にその意味を明らかにするよう命じ、さもなければみんなを殺すと述べた。6日が過ぎても、だれにも分からず、みんなはしかたなく、死を待つしかなかった。部屋の中でじっとしてられない小僧が林まで行ってほっとしていると、途中で三人の者が語り合っているのを耳にする。その内容は、連れ立った友人が、密林で剣によって首を斬ったということだった。かれはすぐさまもどって報告し、人びとを救う。国王は息子の死体を探し出し、宝塔の中に弔い、大臣の子を処刑し、死者を弔った。

第16章 インドのある大汗には108人の皇后がいたが、息子は一人しかできなかった。かれはあるとき狩りで美女に出会い、娶って帰宅した。この女は心根がよくなかったが、可汗は知らなかった。

汗は別の時の狩りで、深山にいる年寄りの修道女が絶世の美女(鹿の仙人の化身)を使っているのを知った。大汗は修道女にうまい話を言って、この下女を娶って帰宅した。別れる時に修道女は下女に数珠を贈り、だれにも与えてはならないと言いつけた。大汗は別荘を設けて

この新婦と睦み、片時も離れなかった。

あの心がけの悪い女は召使いを使って、大汗が大事にしていたゾウ、ウマと息子をつぎつぎと殺し、それからあの新婦に罪をなすりつけた。大汗は女の言うことを本当だと信じて新婦を処刑しようとしたとき、かれの鸚鵡がある物語をして、新婦は死を免れた。しかし、心がけの悪い女に数珠を騙し取られ、数珠をなくした彼女は魅力を失い、同時に寵愛をなくしてしまう。けれども彼女は夢の知らせを通して、最後に心がけの悪い女が使う召使いを探し出し、召使いに起こったできごとの真相をすべて話させた。汗はそれを知ってから自分の行いを悔やみ、出家して修行に出かけた。

第17章 ある年より夫婦には9頭の乳牛がいて、老人は肉を食べるのが好きなので、4、5日に1頭を殺していた。老婆は乳を絶やさないうために、1頭は残すように言ったが、最後にこの乳牛も老人に殺されてしまい、乳首だけが残された。老婆は老人を捨てて山に行き、乳首を岩に隠したが、その乳首から次から次へと乳が出てきた。ある日、彼女は老人に乳製品をあげると、老人は後をついてきて、乳首まで食べてしまった。

飲食物がなくなった老婆は生きるために食べ物を探し、疲れはててある洞穴に入った。夜中に、洞穴に虎、豹、熊などさまざまな動物がやって来た。ある日、虎は老婆を見つけ、食べようとした。ウサギが、彼女を食べるよりもおれたちの洞穴を見張らせたほうがいいと言った。虎はもっともだと思って、彼女を許した。門番をして食べ物も住まいもできた老婆は、ある日老人に肉をやった。老人はまたも後をついて来て、老婆が止めるのも聞かずに洞穴に入って住んだ。ある日、動物たちは二人がいっしょにいるのを見て、こんなでは自分たちの安

全が危ういと思って、かれらを食べてしまった。

第18章 ある愚か者が、妻の勧めで、ロバを追い立てながら商売に出かけた。しばらく行くと、向こうから一群の強盗がやって来たので、洞穴に隠れた。強盗たちはかれが隠れた洞穴の入り口で荷物を降ろし、食事をしたり休んだりして、長らく過ごしていた。洞穴の中の愚か者は我慢できずに、大きな音でおならをすると、伝わって来た音がひどく奇妙だったので、強盗どもはびっくりして逃げてしまった。愚か者はそのすきにかれらの荷物を積んでもどり妻にわたし、自分がとても勇敢だと話した。妻はかれよりもっとすごい人がいるから我を忘れて得意にならないようにとかれを戒めた。かれは信じないで、あくる日に腕試しをすると誓った。次の日、計画どおり腕比べをするが、愚か者はたちまち負けて、がっかりしてもどってきた。ところが、かれが腕比べしたのは他でもなく、自分の妻だったのは知らなかった。

第19章 父と子が材木を売って暮らしていた。ある日、父親はいちめん草木が茂ったところを指して息子に、「将来おまえがわしをここに葬るなら、運がよくなり幸せになるだろう」と語った。息子はそのとおりにしたが、なにも変わらなかった。そこで、材木売りをやめて、国王にじかに会って、姫との結婚を求めることにした。国王はこの人が只者でないと思って、その求めに応じようと考えたが、皇后は反対し、その能力を試すように提案した。

その時、一群の敵が領土に侵入して来たので、皇后はかれを出陣させた。かれは単騎で敵陣に突っ込み、ついで道ばたの大木を抜いて敵を叩き、敵を撃退した。皇后はまた山に行き、長さ9ひろで、色鮮やかな狐の毛皮を剥いてもどってくるよう命じ、かれはそのとおりにし

た。皇后はさらにモンゴルの悪鬼9匹を殺すよう命じ、かれはそれらを毒殺して、その財産をすべて没収し国王に渡した。国王と皇后はおしまいに娘をかれに嫁がせることに同意し、かれにたくさんの財産を分けた。

第20章 雌ライオンは雌牛をかみ殺したが、その子牛は雌ライオンについてそのすみかまで来ると、ライオンの子といっしょに雌ライオンの乳を飲み、いっしょに遊んだ。雌ライオンが死んでからも、かれらは片時も離れない友人になった。キツネはかれらの友情がこのように途切れないので、ずっとおとなしくしていた。その後、キツネはかれらを別々に訪ねて仲を裂き、反目して仲たがいするようにしむけた。かれらは争い、その結果2頭とも傷ついてしまった。キツネが得意になって、戦利品を手に入れようとしたとき、死ぬ前に気がついたライオンと牛は最後の力をふりしぼってキツネの命を縮めてしまった。

第21章 ある金持ちの家に娘が一人いて、別の貧乏人の家にも男の子がいて、後に二人は夫婦となった。両家の年よりは相ついで世を去った。金持ちの羊の群れはだれも管理する者がいなくなり、狼に食べられて子羊が1頭だけ残った。かわいそうな子羊は昼間には山の洞穴に隠れ夜に出てきて草を食べ、とても孤独だった。ある日、洞穴にウサギがやって来た。ウサギは子羊の身の上を知ると、羊の群れに連れて行ってくれることを承知した。二匹がいっしょに道を行くと、途中で狼に出会ったが、ウサギは少しも恐れず、天国から使わされた特使という身分で天の命令を伝え、狼の数々の罪悪を数えあげ、たちまち逃走させてしまった。こうして、ウサギは子羊をぶじにネパールの羊の群れまで連れて行った。

第22章 ヘイグタ国のタイベン汗はロバの

耳を生やして、他人に知らせないために、いつも散髪する者を処刑にしていた。ある貧乏な若者が汗の散髪する番になった。若者が出かける時に、母親はビンの固まりをやり、散髪しながら食べなさいと言いつけた。タイベン汗は散髪している若者がなにか食べているのを見て、一口食べると、たいそうおいしかったので、どうやって作ったのか訊ねた。若者は母親の乳で作ったと答えた。汗は自分と若者が同じ母の乳で作ったものを食べたと言って、かれを放し、自分がロバの耳を生やしていることを言うなと命じた。人びとは若者がどうして殺されなかったのか訊ねたが、若者は話さなくて、内心で我慢して病気になった。医者がかれが内心のことを話さなければ、病気はよくなると言った。かれは人気がないところへ行って、野ネズミの穴に向かって大声で、われらが汗にはロバの耳が生えていると叫んだ。この言葉はうわさで伝わり、汗の耳にまでとどいた。汗はひどく怒り、人を遣わしてかれがどうして約束を守らなかったのかとがめた。かれがありのままを話し、汗に「もしも宮廷内外の役人と同じように、耳の付いた帽子をかぶれば、耳が長いという欠点が隠せるでしょう」と言った。汗はこの考えを採用すると、はたして効き目が現われた。それから、汗は宮中に出ても、かれが長いロバの耳を生やしていることはだれも知らなかった。

第23章 ある貧しい男が金持ちの娘を嫁にしたが、やはり貧しい暮らしをしていた。ある時、娘は夫を連れて実家にもどり、いくらか金を手に入れようとしたが、実家の者に馬鹿にされてしまった。それからふたりは発奮し、男は商売をし、女は布を織って、まもなく豊かになった。かれらは再び実家にもどるとき、多くの贈物を持っていった。その夫は前回に受け

た屈辱をはらすために、はかりごとをたくらんだ。かれは自分の馬を指しながら、あれをよく育てなら、大便の時に真珠をひねり出すと言った。かれらは高値で持ち去ったが、だまされたということが発覚すると、かれを大木に吊るし、河に投げ込む用意をした。

夕方にせむしがブタの群れを追いながら通りかかり、なぜ木につるされているのか訊ねた。かれはクル病を治しているところだと答えた。そのせむしも自分の背を治したいと思って、ふたりはその場所を交替した。夜に実家の者がこっそり木の上の人を河に投げ込み、婿を殺したと思った。あくる日、婿がブタの群れを追いながらやって来るのを見て、どうしたことか訊ねた。かれは河に投げ込まれてから、竜王に財産を分けてもらい、ブタの群れをもらったが、今もどっても間に合うと答えた。愚かな実家の者たちは財産を得ようと欲張って、先を争って河に跳びこんだ。こうして娘婿はかれらが残した財産をすべて独り占めしてしまった。

第24章 ある人が鉄の桶を持って農地の借金を催促に出かけると、途中で人の皮で作った袋を持つ悪鬼に出会い、友だちになった。おしゃべりをしているうちに、借金取りは鬼がある王子を重病で息も絶え絶えにしていることを知り、同時にその治療の方法も聞き出してしまった。鬼と別れてから、その人はすぐさま国王のところに行って、鬼の言うとおりに王子の病を治し、命を救ったお礼にたくさんの財産を手に入れる。鬼と謝金取りが再会すると、鬼はその人に皮袋を持たせて、人を損なう術を施そうとした。借金取りはすきをねらって皮袋を破って、河に捨ててしまう。鬼はだまされたと知り、袋の破片を集めてから、狂ったように地上にさまざまな病魔や災いをまきちらし、それからは人を信用しなくなった。

第25章 ある老人が大事にしていた角が六つある牛を失い、とても気がせいでいた。かれはインドのマリヤ山に住んでいた竜王と悪鬼に焼香し叩頭して夢でのお告げを求めた。神々は相談してから、老人に夢で知らせた。老人は牛を見つけ非常に喜び、会う人ごとに夢のお告げに霊験があることを話した。

三人の息子がいた男は、老人の言うとおりに竜王と悪鬼に焼香し、運命を変えるような夢の知らせを祈った。あくる日眼を醒ますと自分が女になっているに気がつき、そこで家にもどろうとせず、異郷に嫁いで、三人の娘を産んだ。またある時、頭に大きなおできができている人が竜王と悪鬼に焼香して祈り、あくる日に眼を醒ますと、おできがなくなっていた。もうひとり頭におできができている人も同じようにすると、あくる日、頭に大きなおできがもう一つ増えている。

第26章 インドのある国王の宮廷に、歌をうたえるカエルと踊りがうまい鸚鵡がいて、ある人が国王のこの二つの宝物を専門に飼育していた。後に、宮中に歌がうまくて踊りの上手な人が来ると、国王のかれを寵愛し鸚鵡やカエルをかまわなくなった。

飼育員はカエルと鸚鵡を野外に放したが、不幸にもカエルはカラスにくわえられてしまった。カラスはカエルを食べようとしたが、カエルが体を洗わしてくれと頼んだので、カラスは承知した。かれらは山の泉まで来て、洗おうとすると、カエルは石のすきまに入って逃げてしまう。飼育員がやって来ると、カエルは自分がじつは白竜王の娘だと話す。飼育員の以前の恩に報いるために、カエルはかれに魔術を教えてやる。飼育員がもどった時に鸚鵡は一羽のタカにくわえられてしまう。

鸚鵡とカエルを捨てた飼育員は国王に責めら

れ、処刑されることになるが、従者の懇願で、追放される。

荒野に追放された飼育員は、鳳凰の口から白蛇を救い、それはじつは白竜王の王子であった。白竜王は自らかれに謝意を示し、かれが娘を救ってくれたことでお礼をし、その謝礼は赤毛の雌犬、花色の布袋と宝の杖であった。ふしぎなことに、この杖で袋を叩きさえすれば、食べたい物がいつも出てきた。あの犬は夜に美女に変わり、かれの妻となった。

ある日、飼育員外出してから、あの美女は犬の皮を脱いで入浴していた。飼育員はもどつてから犬の皮を火に投げ捨ててしまう。美女は服が焼かれるのを見て、「わたしたちはもういっしょに住めなくなりましたから、来年のある日にカササギの羽で作った服を着てわたしを救いに来て」と話す。

あくる年、飼育員はカササギの羽を着て国王のところへ行って手妻を探し出し、カササギの羽の服でだまして国王を場外に連れ出して処刑にし、その国を自分の物にした。かれは4人の

息子をもうけ、それぞれインドの法王、モンゴルの神射王、ゲセル軍王と大食の財王にする。物語がここまで語られると、サイン汗はふしぎな死体をナカザナ尊者のところまで背負って行き、すべての物語は終わりとなる。(つづく)

原注

- 1)、2) 金克木『梵語文学史』北京 人民文学出版社 1980年 第223頁
- 3) 佟錦華『藏族文学史』四川民族出版社 1985年 第76頁
- 4) [蒙古] 策・達木丁蘇榮等編『蒙古文学概要』呼和浩特 内蒙古人民出版社 1982年 第1048頁
- 5) 同上書 第1032頁
- 6) 『喜地呼爾』呼和浩特 内蒙古人民出版社 1957年 第150頁 原文より転写或いは翻訳を経て引用した文字は、すべて筆者が行ったものであり、一々注記しない。
- 7) 同上書 第80頁